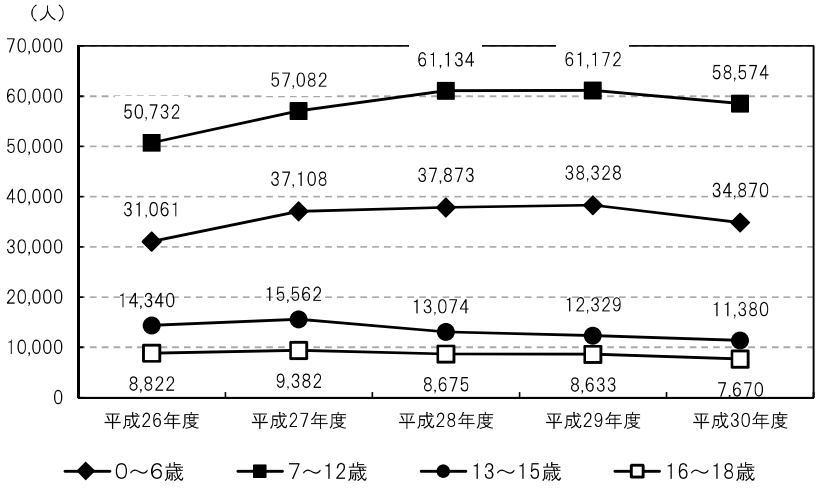
第2章　子ども読書活動の現状

第一　品川区の取り組み

1　区立図書館での取り組み

子どもの図書館利用

区立図書館の子どもの利用状況をみると、延べ利用者数でみると、0～12歳の子どもでは平成26年度に比べて増えているものの、13～18歳の子どもは顕著な変化がみられません。



年代別にみた延べ利用者数の推移

出典：品川区立図書館事業年報

区立図書館での子ども向け事業

各館において定例のおはなし会を実施しており、平成30年度には685回開催し、10,560人の子どもが参加しています。平成27年度より実施回数を増やしたことから、参加者数も増加しています。

年度	参加者数	回数	平均
平成26年度	8,351人	549回	16人
平成27年度	10,089人	613回	17人
平成28年度	11,588人	652回	18人
平成29年度	10,661人	643回	17人
平成30年度	10,560人	685回	16人

定例おはなし会開催実績

出典：品川区立図書館事業年報

また、オリンピック・パラリンピック開催に向け、子どもが身近に外国語や文化に触れられる場をつくり、グローバルな人材育成を支援することも目的としてグローバルおはなしルームや英語でのおはなし会も行っています[7]。

年度	参加者数	回数
平成27年度	220人	2回
平成28年度	237人	4回
平成29年度	321人	8回
平成30年度	309人	7回

グローバルおはなしルーム開催実績

出典：品川区立図書館事業年報

その他、保護者に向けた事業として、「イクメン読み聞かせ講座」を実施し、家庭での読書活動の促進につなげています[8]。

7　グローバルおはなしルームは、外国人等のネイティブによる英語の絵本の読み聞かせや外国絵本の展示などを行っている行事です。

8　イクメン読み聞かせ講座は、子どもに絵本を読み聞かせてあげたいと思うお父さんやおじいさんを対象とした読み聞かせ講座です。

乳幼児啓発事業

平成20年度より区立図書館と児童課・保健所と連携し、ブックスタート事業を実施してきました。平成28年度からは、乳幼児啓発事業「はじめてのえほん よんで よんで」という事業に変更し、乳幼児期より本の楽しさを知ってもらうことを目的として、4か月児健康診査の際に受診者に引換券を配布し、区立図書館でオリジナル手提げ袋に入った絵本と啓発リーフレットに引き換えています。

情報発信事業

区立図書館による本に関する情報発信事業として、0～6歳の子どもを対象とした読み聞かせにおすすめ本のリスト「ねぇ、この本よんで！」を毎月発行しています。毎月テーマを決めて絵本を10点掲載し、「毎月23日は、しながわ親子読書の日」のPRも行っています。

なお、後述するアンケート調査では、1～4年生の保護者のうち68.9%が「ねぇ、この本よんで！」を知っており、実際に子どもの本を選ぶ際に活用するという保護者は15.3%でした。

また、0～2歳向けと3歳～5歳向きのブックリスト「おひざのうえで」を発行しています。秋の読書週間には、前年に発行された本の中から図書館職員が選んだおすすめのリスト「よんでみたいな！」、「Let's Read！」を対象年齢別に発行しています。

「ねぇ、この本よんで！」

児童センター等との共催事業

区立図書館では、児童センターとの共催で、乳幼児向けの絵本の選び方や読み聞かせのポイントを紹介する絵本講座や、人形劇、歌遊び等を開催しています。

図書館を利用しない家庭も、児童センターは利用しており、本に触れる機会となっています。最近では、近隣保育園も参加するなど、毎年多くの子どもが参加しています。

年度	絵本講座	人形劇	歌遊び	参加者数
平成26年度	4回	6回	2回	1,100人
平成27年度	4回	6回	4回	1,116人
平成28年度	4回	6回	4回	1,114人
平成29年度	8回	4回	4回	1,445人
平成30年度	8回	3回	4回	881人

児童センター共催事業開催実績

出典：品川区立図書館事業年報

その他、各地域図書館においても、近隣の学校やその他施設との連携・共催事業を行っています。

来館・訪問サービス

保育園・幼稚園・幼保一体施設や小学校・義務教育学校（前期課程）、児童センターから区立図書館への訪問を受け入れる来館サービスや、区立図書館の職員が出張する訪問サービスも実施しています。訪問サービス・来館サービスともに、年々要望が増えてきています。

入院する子どもに図書館サービスを提供することを目的として病院を訪れることもあります。また、区内学校からの依頼により職場体験や図書館見学等を受け入れています。

	保育園・幼稚園・幼保一体施設	小学校・義務教育学校（前期課程）		児童センター
		図書館見学	ブックトーク・おはなし会等	
平成26年度	16回	29回	0回	
	404人	611人	0人	
平成27年度	30回	34回	0回	2回
	583人	798人	0人	64人
平成28年度	102回	30回	0回	3回
	2,055人	703人	0人	124人
平成29年度	186回	30回	2回	4回
	3,866人	746人	8人	73人
平成30年度	130回	24回	12回	5回
	2,775人	590人	285人	117人

来館サービス開催実績

出典：品川区立図書館事業年報

	保育園・幼稚園・幼保一体施設	小学校・義務教育学校（前期課程）	児童センター	病院サービス
		ブックトーク・おはなし会		
平成26年度	7回	14回		24回
	436人	369人		182人
平成27年度	11回	26回	7回	23回
	479人	728人	231人	142人
平成28年度	19回	29回	30回	18回
	817人	702人	1,100人	130人
平成29年度	62回	33回	51回	23回
	2,606人	1,113人	1,711人	177人
平成30年度	129回	41回	32人	23回
	4,336人	1,088人	845人	196人

訪問サービス開催実績

出典：品川区立図書館事業年報

2 学校等での取り組み

学校図書館の利用状況

平成30年度における小学校・義務教育学校（前期課程）における学校図書館利用時限数は合計10,064回、中学校・義務教育学校（後期課程）では合計1,664回でした。小学校・義務教育学校（前期課程）においては、毎月各学級1回以上利用している水準ですが、中学校・義務教育学校（後期課程）ではその水準は満たしていません。

小学校・義務教育学校（前期課程）では図書の時間での利用が9,392件で、利用時限数のほとんどを占めています。そのほか、国語科で309回、社会科で65回、理科で29回です。中学校・義務教育学校（後期課程）でも図書の時間の利用が751回と多いですが、国語科での利用も577回と多くなっています。その他、社会科での利用が37回となっています。

中学校・義務教育学校（後期課程）での学校図書館利用時限数の減少は、図書の時間が減ることが原因と考えられます。ただ、授業用資料を学校図書館で収集した回数は、小学校・義務教育学校（前期課程）で1,662回（学級平均3.2回）であるのに対して、中学校・義務教育学校（後期課程）では235回（学級平均1.5回）と少なくなっており、授業での学校図書館活用についても改善の余地はあるといえます。

	教科利用時限	図書の時間	国語科	社会科	算数／数学	理科	その他	授業用資料収集回数	読み聞かせ回数	ブックトーク回数
小学校・義務教育学校（前期課程）	10,064	9,392	309	65	7	29	262	1,662 (3.2)	5,867 (11.2)	1,340 (2.5)
中学校・義務教育学校（後期課程）	1,664	751	577	37	6	12	281	235 (1.5)	541 (3.4)	205 (1.3)

学校図書館利用実績（平成30年度）

学校図書館月間作業報告（平成 30 年度）より

※授業用資料収集回数、読み聞かせ回数、ブックトーク回数の（）内の数字は学級平均の回数です。

※平成30年度の小学校・義務教育学校（前期課程）のクラス数（特別支援学級含む）は526学級です。中学校・義務教育学校（後期課程）のクラス数（特別支援学級含む）は160学級です。

※学校図書館月間作業報告とは、学校図書館運営支援スタッフが従事している年間735時間についての月別報告です。

学校での読書活動

学校においても読み聞かせやブックトークを行っています。平成30年度には、小学校・義務教育学校（前期課程）で読み聞かせは5,867回、ブックトークは1,340回行われており、それぞれの学級平均は11.2回、2.5回でした。中学校・義務教育学校（後期課程）においては、読み聞かせが541回、ブックトークが205回行われており、学級平均は3.4回、1.3回でした[9]。

その他、児童・生徒に学校図書館の利用を促すため、資料面・環境面での様々な取り組みが行われているほか、教室に学校図書館資料を配架することで本を手に取りやすくするアウトリーチ型の取り組みや、区立図書館と連携した来館促進の取り組みも行われています。

学校図書館の運営体制

学校図書館法の改正を踏まえ、外部事業者に委託するかたちで、すべての区立学校に学校図書館運営支援スタッフを配置しています。運営支援スタッフの業務内容は、資料収集のほか、学校におけるレファレンス、ブックトーク、授業支援等多岐にわたる業務を行っています。

学校図書館運営支援スタッフにくわえて、学校図書館ボランティアも学校単位で募集しています[10]。品川区立図書館においては、学校から要請に応じて、ボランティア実務講座の開催や講師の派遣を行い、ボランティア活動の質の向上を図っています。

---

[9] ブックトークとは、あるテーマに沿って複数の本を紹介し、読書意欲を高めるための取り組みです。

[10] 学校図書館ボランティアとは、各学校で募集している学校図書館の仕事をするボランティアのことです。

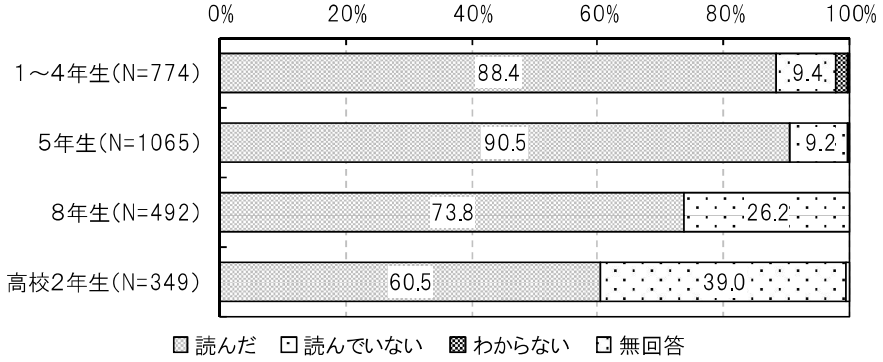
第二　子どもや家庭の読書活動の実態

1　子どもの読書実態

年代別の読書状況

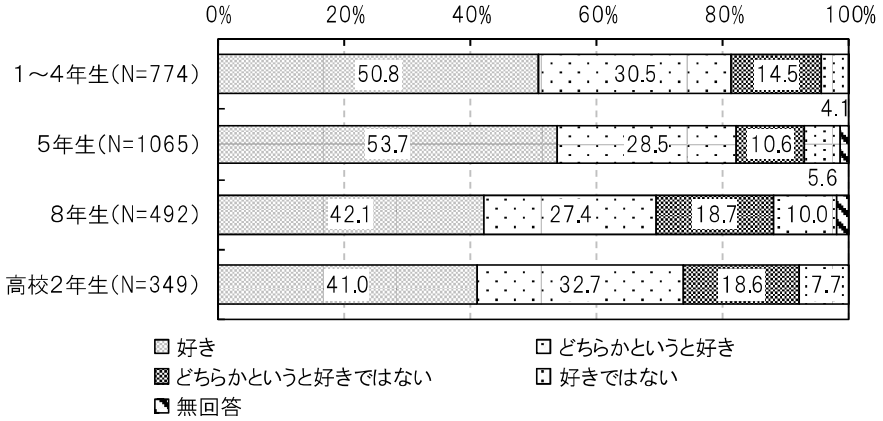
計画策定のために実施したアンケート調査では、過去1か月に本を読んだ子どもは、1～4年生で88.4%、5年生で90.5%、8年生で73.8%、高校2年生で60.5%です[11]。小学校高学年以降は全国の傾向と同じく、学年が上がるにつれて本を読む子どもは少なくなります[12]。

一方、本を読むことが好きだという子どもは、1～4年生で81.3%、5年生で82.2%、8年生で69.5%、高校2年生で73.7%であり、学年が上がるにつれて減少しているものの、実際に本を読んだ子どもの割合ほどは減少しておらず、また高校2年生では好きな子どもの方が多くなっています。



過去1か月に本を読んだかどうか（学年別）

品川区子どもの読書活動に関するアンケート調査より



本を読むことが好きかどうか（学年別）

品川区子どもの読書活動に関するアンケート調査より

---

[11] 本計画を策定するにあたり、以下の6つのアンケート調査を行いました。

調査ア　1～4年生向け調査（対象：区在住の1～4年生の子どもの保護者1,500人、回収率51.6%）

調査イ　5年生・8年生向け調査（対象：区立学校に通う5年生・8年生の子ども、回収率100%）

調査ウ　高校2年生相当の子ども向け調査（対象：区在住の高校2年生相当の子ども1,500人、回収率23.2%）

調査エ　子ども関係施設向け調査（対象：幼稚園、保育園、すまいるスクール、児童センター、回収率87.6%）

調査オ　図書館以外の施設等利用者向け調査（対象：図書館以外の区立施設を利用する人等、回収数873件）

調査カ　品川区職員向け調査（対象：品川区職員、回収数2,517件）

調査ウには学生ではない子どもも含まれますが、本計画では「高校2年生」と表記します。

[12] ここでいう「本」には、国の計画と同じく、マンガ、雑誌、教科書は含まれません。なお、マンガを読んだ子どもは、5年生で68.1%、8年生で55.8%、高校2年生で51.8%であり、本を読んでいる子どもの割合の方が多く、かつマンガを読んでいる子どもの多くは本も読んでいることが分かりました。

本を読まない理由

本を読まない理由については、5年生・8年生・高校2年生の調査では、忙しさや別のことをしているなどの時間的な理由が多いほか、普段から読書をしないという子どもも8年生・高校2年生では1割半ばいました。

また、本を読むことが苦手だから読書をしないという子どもは、5年生で4.0%、8年生で14.6%、高校2年生で16.9%です。割合としては1割前後ですが、読解力が課題として提起されていることを踏まえると着目する必要があります。

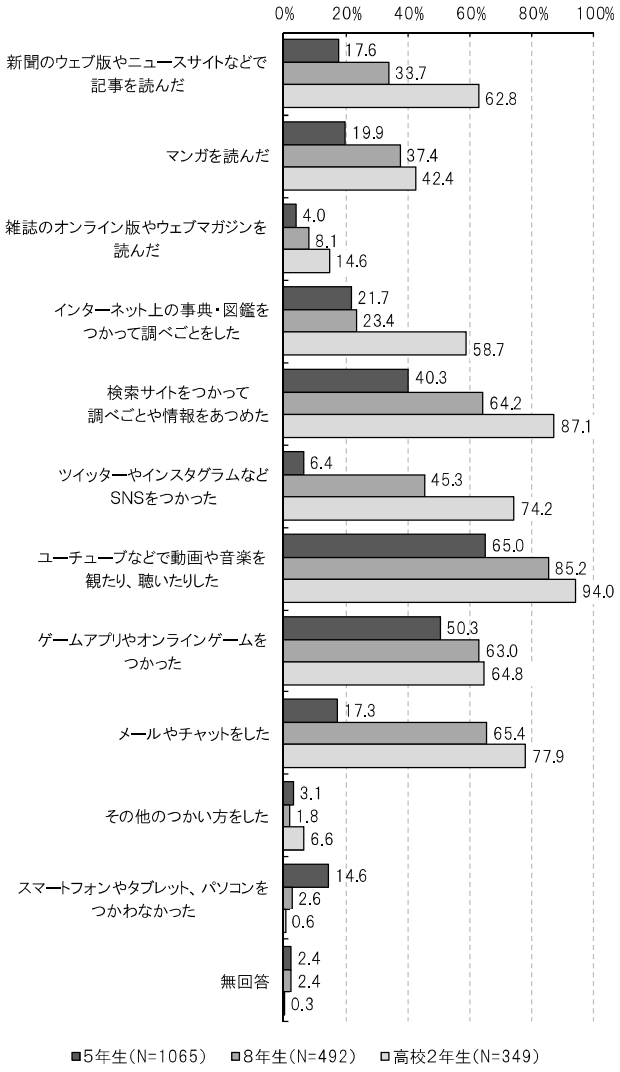
また、区内の中高生、大学生を対象としたワークショップにおいて、本を読むようになるきっかけについて考えたところ、好きな映画やマンガなどの幅広いメディアから本に導入することや、自分が好きなテーマやジャンルの本を個別にすすめることなどが挙げられました。

インターネット等の利用状況

過去1か月にスマートフォンやタブレット端末、パソコンを使ってインターネット等を利用した子どもは、5年生で83.0%、8年生で95.0%、高校2年生で99.1%です。

具体的な利用内容をみると、いずれの学年も動画や音楽の視聴、ゲーム利用が多いですが、学年が上がるにつれて、新聞記事の購読や検索サイトの利用、インターネット上の事典・図鑑の利用が増加します。特に検索サイトの利用は、高校2年生では87.1%となっています。

本を読んでいる子どもや読書が好きな子どもは、そうでない子どもに比べて、調べごとでの利用や新聞購読が多い傾向がみられました。



インターネット等の利用状況（学年別）

品川区子どもの読書活動に関するアンケート調査より

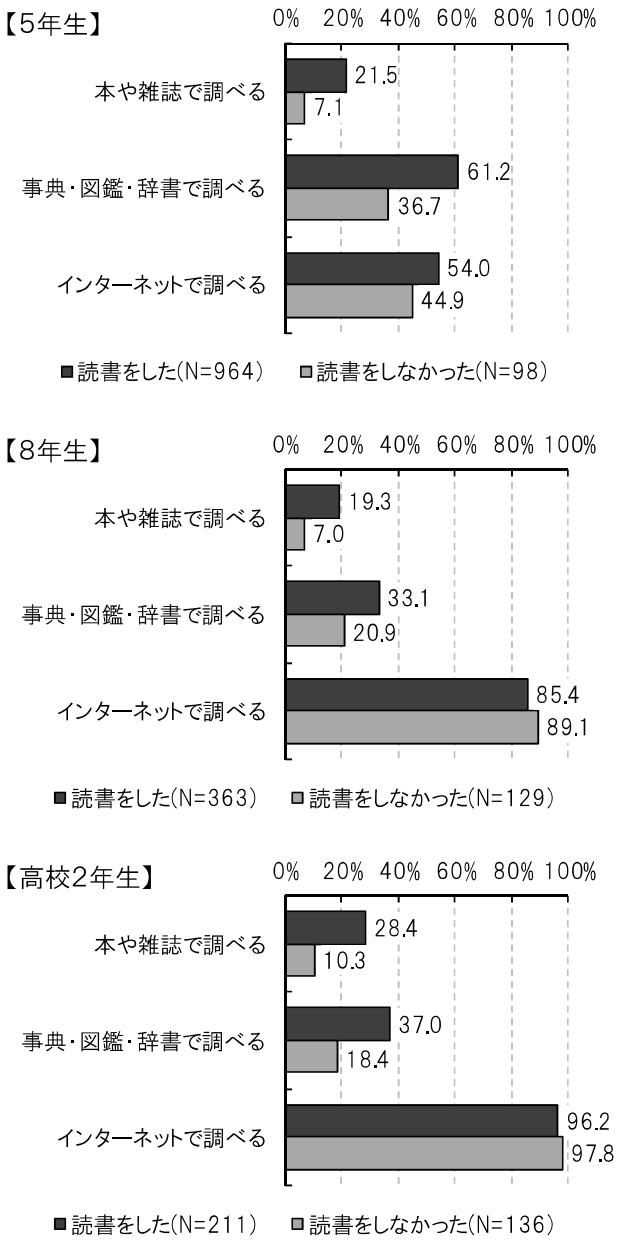
調べるときに利用するメディア

何かを調べる際に事典・図鑑を活用するという子どもは、5年生で59.0%、8年生で29.9%、高校2年生で29.5%と減少します。一方、インターネットを利用して調べごとをする子どもは、5年生で53.1%、8年生で86.4%、高校2年生で96.8%と増加します。

実際の利用も同様であり、紙の事典・図鑑の利用は学年が上がるにつれて減少するのに対して、インターネットの検索サイトの利用は増加します。さらに、インターネット上の事典・図鑑の利用については、5・8年生では2割台であるのに対して、高校2年生になると約6割に増加します。

右のグラフでは特に過去1か月に本を読んだ子どもや本を読むことが好きな子どもは、そうでない子どもに比べて、調べるときに事典・図鑑を利用する傾向があるほか、複数のメディアを選択している傾向もみられました。また、実際のインターネット利用においても、過去1か月に本を読んだ子どもや本を読むことが好きな子どもの方が、オンラインの事典・図鑑を多く利用する傾向もみられました。

これらのことから、インターネットを調べごとに利用することと、本を読むことや読書が好きだということが関係していると考えられます。



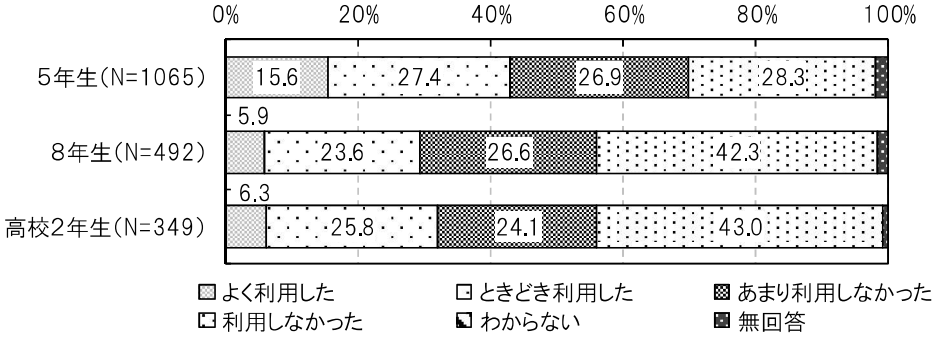
調べるときに利用するメディア（学年別）

品川区子どもの読書活動に関するアンケート調査より

2 読書環境の利用状況

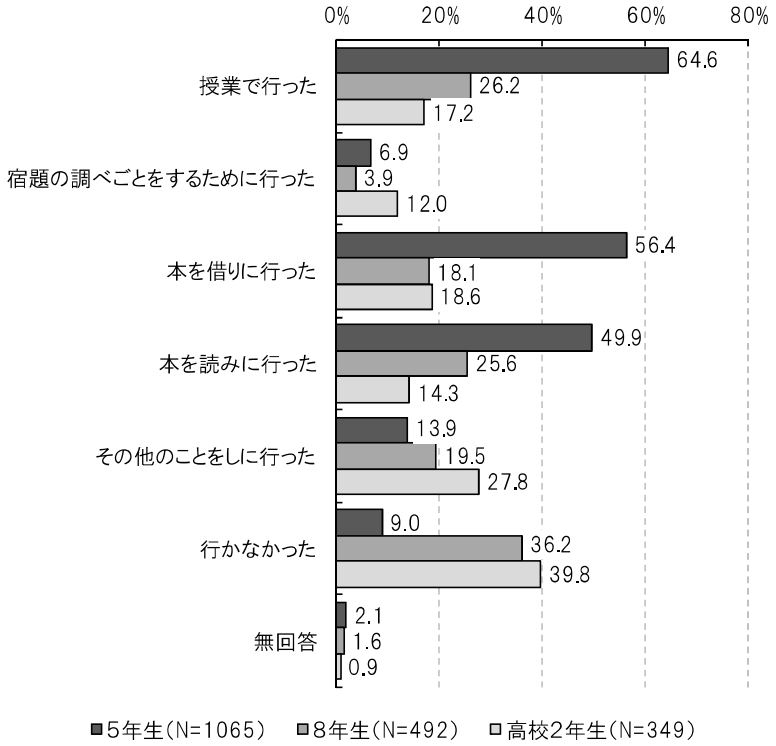
過去1年間に区立図書館を利用した子どもは、5年生で43.0%、8年生では29.5%、高校2年生では32.1%です。一方、学校図書館を過去1か月に利用した子どもは、それぞれ88.9%、62.2%、59.3%であり、いずれの学年においても学校図書館の方が利用されています。また、1～4年生に関しては、学校図書館を利用しているという理由で区立図書館を利用しない子どもが多いことから、子どもにとって学校図書館が重要な読書環境であることが分かります。

ただ、区立図書館と学校図書館のいずれもが、学年が上がるにつれて利用する割合は少なくなる傾向にあります。さらに、学校図書館を授業で利用した割合をみると、5年生では64.6%と他の利用内容に比べて多いですが、8年生では26.2%、高校2年生では17.2%となり、学年が上がるにつれて授業での利用が減少しています。



過去1年間における区立図書館の利用状況(学年別)

品川区子どもの読書活動に関するアンケート調査より



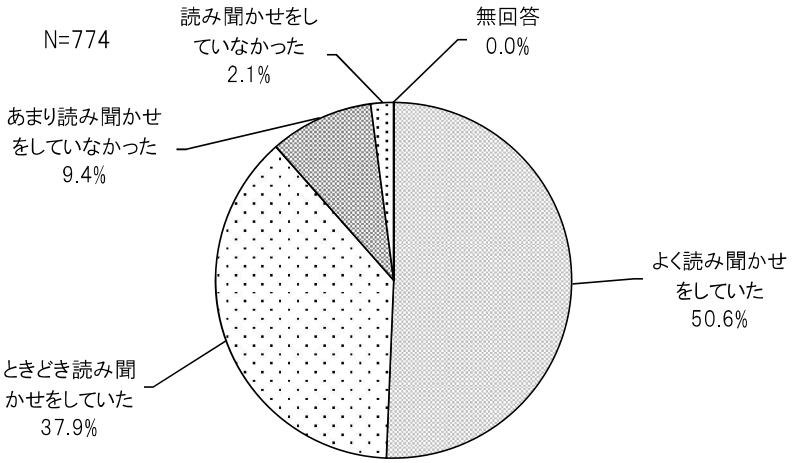
過去1か月における学校図書館の利用状況(学年別)

品川区子どもの読書活動に関するアンケート調査より

3 家庭等での読書活動の状況

読み聞かせの状況

1～4年生の家庭では、乳幼児期に読み聞かせをしていた家庭は88.5%でした。読み聞かせをしている家庭がほとんどですが、国等の調査では、乳幼児期に読み聞かせを行っていた家庭の子どもほど本を読む傾向にあることが分かっていることから、読み聞かせをしていない家庭が1割程度ですが、着目する必要があります[13]。



乳幼児期の読み聞かせの状況（1～4年生）

品川区子どもの読書活動に関するアンケート調査より

家庭や友だち間での本を通じたコミュニケーション等

国の「第四次計画」では、家庭で保護者と子どもがいっしょに取り組む「家読（うちどく）」や子ども同士の本のすすめ合い等を推奨しています[14]。「家読（うちどく）」にあたる活動の状況をみると、5・8年生では半数以上の家庭で読んだ本について話がされており、4割程度の家庭で同じタイトルの本を読む、同じ時間に本を読むという活動がなされています。また、高校2年生においても、3割程度の家庭で読んだ本について話す、家庭で同じタイトルの本を読むということがなされています。

さらに、高校2年生においては、友だちと本の話をしたり、すすめ合ったりすることも4割程度の子どもが行っていることが分かりました。

---

[13] たとえば、平成30年度「子供の読書活動推進計画に関する調査研究」（文部科学省）において、乳幼児期の読み聞かせの有無と現時点での読書状況の相関が分析されています。

[14] 「第四次計画」では、「家読（うちどく）」を「家庭において子供を中心に家族で同じ本を読むことで、本を媒介として相互理解を深め，家族の絆が一層深まることを目指す活動」と定義しています。

第三　計画策定の背景（まとめ）

a　子どもの好みとその発達を捉えた取り組みが必要である

○乳幼児期の読書活動がその後の成長過程における読書習慣に影響を及ぼしていることが分かっており、乳幼児期からの継続的な取り組みが必要となります。

○継続した取り組みを行う際には、成長とともに興味・関心は一人ひとりの特徴を有することに留意する必要があります。ワークショップで中高生・大学生が提案したように、個々の好みや適した導入のあり方の検討が求められます。

○一方、読書バリアフリー法が施行されたことを踏まえ、従来の視覚に障害のある子どもへの対応を充実させるとともに、子ども一人ひとりが感じる読むことの困難さに対応していく必要があります。

b　学年が上がるにつれて読書をしなくなるため、読書活動の機会を充実させる必要がある

○過去1か月間に本を読んだ子どもは、小学生では約9割ですが、8年生では7割強、高校2年生では約6割と減少しています。

○中高生に関しては、本を読むことが苦手だから読書をしないという8年生・高校2年生は1割半ばであり、読書に対する苦手意識を持っている子どもが一定数います。

○その状況に対して、区立図書館においては中高生に向けた取り組みは十分ではありません。また、小学校に比べて中学校での学校図書館利用は改善する余地があります。

c　本等の併用も含め、インターネットを適切に使いこなす必要がある

○5年生以上の子どものほとんどがインターネットを利用しています。趣味やコミュニケーションでの利用が多いですが、検索サイトの利用も多く、子どもにとって身近な調べ物のツールとなっています。

○本や事典・図鑑よりもインターネットが利用される傾向にありますが、過去1か月に本を読んだ子どもや読書が好きな子どもは、本や事典・図鑑も活用していることが分かりました。また、日常的なインターネット利用においても情報検索が多い傾向にあることが分かりました。

○学習指導要領において重視される情報活用能力を育むためには、子どもがインターネットを調べるツールとして適切かつ有効に利用できるようにする必要があります。

d　子どもにとって身近な学校図書館を中心として、地域の読書環境を充実させる必要がある

○学年にかかわらず、区立図書館よりも学校図書館をより利用していることが分かりました。ただし、学年が上がるにつれて利用が少なくなります。

○このことから、学校図書館法改定以降の国の方策とも連動させながら、子どもにとって身近な読書環境として、各学年に応じた学校図書館の充実方策を検討する必要があります。

○身近な読書環境という点では、家庭での読書活動を活性化することが大切であり、国の第四次計画で示された「家読（うちどく）」の推進等を進めることが求められます。

第四　計画策定にあたっての視点

A　一人ひとりの育ちや知的関心に応じた継続的な取り組み

品川区ではこれまで乳幼児の頃から本に触れ、読書に親しむ取り組みを充実させてきました。これまでの取り組みを踏まえ、本計画においてはさらに、子どもの成長過程、そして一人ひとりの好みや個性に応じた取り組みへと展開していきます。一人ひとりに応じた本との出会いを通じて、あらゆる子どもが本を読むことの楽しさを実感できるようにします。

一人ひとりの子どもの育ち、そして知的関心の方向性に対して継続的にかかわることで、子どもが本に接し続け、苦手意識や嫌いだという感覚を持たないようにする取り組みを展開します。

B　読書が好きだという中高生を増やすための取り組み

本計画では、中学生段階・高校生世代に着目した読書活動に取り組みます。この年代は読書をする子どもが少なくなるものの、実際の読書活動の有無とともに、本計画においては本を読むことが好きであり続けることを重視します。本を読まない理由をみると忙しさによるところが少なくありませんが、読書が好きであれば、本を読む姿勢ができていると考えられます。また、何かを調べる際にも多メディアの利用をするようになるとも期待されます。

中高生になっても本を読むことに前向きであり続け、本を読み込むことができるようになり、ひいては様々な情報メディアの活用ができるような取り組みを展開します。

C　多様なメディアを組み合わせた情報活用能力を育む取り組み

これからの社会においてインターネットやSNSを通じて知識・情報を収集するスキルは必要不可欠です。それとともに、本や事典・図鑑等も併せて活用し、正しい知識・情報を得ることも大切です。そこで本計画では、インターネットの利活用のみならず、多メディアを組み合わせた情報活用能力を育むことを目指します。複数のメディアを活用することで自分が必要とする知識・情報を適切に得ること、そしてそれを実社会での行動につなげられるようになることを目指し、学校での調べ学習を中心とした取り組みを行っていきます。

D　地域総がかりでの環境形成

上記の取り組みを行う上では、区立図書館と区立学校・学校図書館はもとより、高等学校や大学、そして子どもが過ごす児童センター・地域センター等の公共施設、また商店街や町会・自治会等が連携する必要があります。それはまた、生まれ育った環境に左右されず、あらゆる子どもが読書活動を行っていくためにも必要なことです。

連携にあたっては、学校と地域をつなぐ学校地域コーディネーターをはじめ、様々な区民団体・ボランティアの活躍が不可欠です。地域における活動の活性化を図るとともに、区立図書館が中心となって支援することで、地域総がかりでの子どもの読書環境の充実に取り組んでいきます。